

概念メタファー理論に基づくコロケーションの誤用分析 —〈頭/脳は機械〉を例に—

李 文 鑫

要 旨

本研究では、〈思考〉メタファーに関して、日本語でも中国語でも〈考えは機械の動き〉という上位概念メタファーがあるが、その下位概念メタファーとして、日本語では〈頭は機械〉があるのに対して、中国語では〈脳は機械〉があることを示して、目標領域及び写像において日中両言語にズレがあることを明らかにした。さらに、大型学習者書き言葉コーパスのデータを分析し、中国語を母語とする日本語学習者が自然産出したコロケーションを①母語の〈脳は機械〉の写像に対応する誤用、②母語から目標言語へシフトしていく途中の誤用、③目標言語の〈頭は機械〉の写像と対応する正用の3種類に分類し、目標領域及び写像への間違ったアクセスによる概念誤用の例を示した。そして、コロケーションの誤用原因は日中両言語における概念メタファーの写像のズレによることを明らかにした。

キーワード：概念メタファー、コロケーション、概念誤用

1. はじめに

近年、さまざまなコーパスの構築と公開に伴って、コーパスの中で語の出現頻度や語と語の結びつきの結束度をもとに、コロケーションの抽出やコロケーションに関する習得研究が多数行われている（大曾・滝沢2003、李2016）。

Liu (2010) はコロケーションに関する従来の研究を2種類に分けている。1つは、コロケーションの定義及びコロケーションの恣意性⁽¹⁾について論じた研究、もう1つはコロケーションの習得、指導法について論じた研究である。前者はイディオムの扱いや語と語の結びつきの程度についてコロケーションの分類を試みる研究である。後者は学習者と母語話者を比べて、コロ

ケーションの識別度、産出の違いについて論じる研究である。

前者のコロケーションの恣意性についての捉え方の違いは、後者の指導法に影響を及ぼす。コロケーションを完全に恣意的なものとして捉える研究者は大量のインプットによって習得を促す指導法をとる傾向がある (Webb, Newton & Chang 2013, Szudarski & Carter 2016)。一方、コロケーションを完全に恣意的なものとしては認めず、コーパス認知言語学の知見を生かし、コロケーションの意味側面を重視する指導法をとる研究者も現れてきた (Kövecses & Szabó 1996, Boers 2000)。

李 (2017) は、概念メタファーとコロケーションとの関係を述べ、コロケーションを完全に恣意的なものではなく、多くの場合概念メタファーによって動機付けられていると主張した。また、「興味」を例として、日本語と中国語の概念メタファーの異同を探り、学習者コーパスに現れる個々のコロケーションの誤用の原因を分析し、誤用の原因は日中両言語の概念メタファーのズレであることを明らかにした。

本研究は李 (2017) の主張を踏まえ、〈思考〉メタファーについて日中の異同を探る。概念メタファーによる概念誤用の例を提示するために、大型学習者書き言葉コーパスを利用し、学習者のコロケーションの自由産出は概念メタファーに基づいていることを提示し、学習者のコロケーションの誤用と、母語及び目標言語の概念メタファーとの関係を論じる。

2. 先行研究

2.1 概念誤用 (Conceptual Error)

Danesi (1993) は、学習者がL1の概念構造に基づき、L2の語彙、文法構造を用いてL2を産出している現象を指摘し、概念流暢性 (Conceptual Fluency, CF) の重要性を強調した。概念流暢性は認知的マッピング操作 (cognitive mapping operation) という。それは、複数のストラテジーを含み、感覚経験を概念化の世界にマッピングすることを意味している (Danesi 2008)。例えば、以下の (1)~(3) は〈人生は旅〉という概念メタファーに基づくメタファー表現である。

- (1) 新しい人生の出発点に立つ。
- (2) 人生の交差点には信号も標識もない。
- (3) 人生は終点が見えない旅である。

我々は「旅」という具体的な概念を用いて、「人生」という抽象的な概念を理解する際、旅の構造としての「出発点」「交差点」「終点」を、それぞれ人生の中に起きる出来事に対応づけている。(1)～(3)の意味を理解するには起点領域<旅>と目標領域<人生>の写像を対応させて関連づける認知的マッピング操作が欠かせない。

写像とは元来「2つの集合間において、一方の集合の要素に対し、他方の集合の要素を一つ対応させる」ことを指す数学用語で、この「集合」を「(認知)領域」と読み替えて転用されたものが、認知言語学・認知心理学で使われる「写像(マッピング)」である(辻2013:156)。本稿では、概念メタファーの起点領域と目標領域の対応関係を写像として扱う。

Danesi (2008:234)では、起点領域と目標領域のマッピング操作の能力をメタフォリカル・コンピテンス (Metaphorical Competence, MC) と呼んでいる。MCは、「言語能力」(linguistic competence)、「コミュニケーション能力」(communicative competence)とともに、目標言語習得において欠かすことのできない要素とされる(Danesi 1993, 2008)。

Danesi (2008:234)は、MCを「抽象的な概念を具体化し、適切なイメージ・スキーマおよび起点領域にアクセスする能力である」と定義している。つまり、L2を身につけるためには、抽象概念を理解する適切なイメージ・スキーマおよび起点領域にアクセスする能力を身につけることが重要なのである。一方、ある抽象概念に対するイメージ・スキーマや起点領域がL1とL2で異なっている場合、学習者が間違ったマッピング操作で概念誤用 (Conceptual Error, CE) を引き起こすと予想される。

例えば、李(2017)で挙げた誤用例「*興味を培養する」「*興味を抜く」に関して、前者は今までの研究では誤用の原因は母語の直訳にあると判断されているが(李2016)、後者は母語の直訳ではない非直訳(母語にない語

と語の結びつき)の誤用である。概念構造を見ると、前者も後者も母語の概念メタファー (<興味は植物>)によって支えられていることが明らかである。つまり、直訳の誤用であれ非直訳の誤用であれ、これらは母語の概念メタファーと目標言語の概念メタファーのズレによって生じたもので、概念誤用である。

L2を身につけることは、単にL2を使用するのではなく、CS2 (the conceptual system of the target culture : L2の概念構造)を通してL2にアクセスすることを意味している。学習の初期段階では、学習者は無意識にCS1 (the learner's native conceptual system : L1の概念構造)を通してL2構造にアクセスしているが、その後、L2に習熟するにつれて、CS2を通してL2構造にアクセスすることができるようになる。しかし、これまでの研究で示されているように、L2構造にアクセスすることはCS2をすべて吸収し、さらにそれに直接アクセスする方法を明示的に教えた場合にのみ可能になる (Danesi 2008)。そうでない場合、学習者が産出したL2は、言語表現としてはL2の格好をしていながら、概念構造ではCS1のまま—(CS1) L2—である。たとえ語彙、文法知識が上級レベルに達しても、概念流動性が依然として低いレベルのままなのである。つまり、L2を身につけるには、(CS1) L2から概念構造までCS2である (CS2) L2へのシフトが必要だということである。したがって、学習者の誤用の分析には、概念誤用の観点があるが、これまでの研究は、学習者の誤用を母語の直訳であるかどうかという言語転移の問題として捉えるに止まっている。また、本稿は、概念誤用は Danesi (2008) が示したイメージ・スキーマ、起点領域を間違えたマッピングに限らず、目標領域を間違えたマッピングもあることを提示したい。よって、本稿はまず日中の概念メタファーの異同を紹介する。次に、学習者が目標言語を産出するとき、CS1にアクセスして産出した誤用例、及び (CS1) L2から (CS2) L2へシフトしていく途中の誤用例、CS2にアクセスして産出した正用例を提示する。

2.2 <思考>メタファー

中国語の<思考>メタファーに関する先行研究として Yu (2003)、韓

(2014) が挙げられる。Yu (2003) は中国語の〈思考〉メタファーとして〈THINKING IS MOVING〉〈THINKING IS SEEING〉を挙げ、〈思考〉メタファーは空間移動と視覚感知という身体経験に根ざしていると述べている。韓 (2014) は Yu (2003) の研究に基づき、さらに細かく〈思考〉メタファーを考察し、〈考えは物理的なもの〉、〈考えることは身体行為〉の2つの上位メタファーと10のサブメタファーに細分化している。しかし、具体的な用例にはいくつか妥当ではないものがある。例えば、〈考えることは動くこと〉に関して、以下の用例が見られる。

- a. 动脑筋 [頭を働かせる]
- b. 转念头 [思案をめぐる]
- c. 脑子转得快 [頭の回転が速い]
- d. 脑袋变浆糊了, 想不通了 [頭が回らなくなり (直訳: のりになる)、納得できなかった]
- e. 真是个木头脑袋, 和你说都说明白了 [頭が固い (直訳: 頭が木でできている)。いくら説明してもわからないなんて]

(韓 (2014: 133) より引用、引用者が一部修正)

例 a から e は、〈考えることは動くこと〉のサブメタファーの〈考えることはものの動き〉の例として挙げられている。なぜこのような写像ができたかについて、韓 (2014) では、〈頭は容器、考えは内容物〉として捉える場合、〈内容物〉がさらさらの液体であれば、〈内容物〉は自在に回ると述べられている。しかし、例 a から e の中で液体との関連が見られるのは d だけで、ほかの用例は液体との関係は観察されにくい。本稿ではこれらの用例は他の概念メタファーによって支えられていることを 4.1 節で述べる。

3. 研究目的と研究課題

本稿では、まず、〈思考〉メタファーに関して、日中間の違いについて論じる。次に、概念メタファーと学習者の産出したコロケーションの関係を論

じる。具体的には、以下の2つの研究課題を設定する。

課題1：〈思考〉メタファーは日中間にどのような違いがあるのか。

課題2：概念メタファーと学習者が自由産出したコロケーションはどのような関係があるのか。

上記の研究課題について日本語と中国語コーパスを利用して調査を行う。課題1では、NINJAL-LWP for TWC（以下、TWC）⁽²⁾と北京大学 CCL 語料庫（以下、CCL）⁽³⁾からそれぞれ日本語と中国語の用例を抽出し、日中間の〈思考〉メタファーの異同を比べる。次に、学習者コーパスである Lang-8 Corpus of Learner Japanese v1.0（以下、Lang-8 学習者コーパス）⁽⁴⁾から母語を中国語とする学習者が産出する文を分析対象に、課題1の概念メタファーの写像に対応するコロケーションを抽出し、考察対象とする。従来の学習者作文コーパスは、課題文の制限によって、産出する内容が限られている。そのため、観察対象である〈思考〉メタファーに基づくコロケーションがほとんどない。よって、本研究は日本語作文の文数が多い Lang-8 学習者コーパスを利用することにする。課題2のコロケーションの誤用及びその修正は Lang-8 学習者コーパスの元データを参考にする。

4. 結果と分析

4.1 〈脳は機械〉（中）VS 〈頭は機械〉（日）

本節では、日中両言語のコーパスから用例を抽出し、日中両言語の概念メタファーを比較する。まず、CCL から中国語の用例を提示する。次に、日本語の対訳を作り、TWC で調べ、それに当たる用例を提示する。*印の文は筆者の作例で、中国語と日本語のコーパスには該当する用例がないことを示す。（下線は筆者、以下同様）。

(1) 中国語：脑子里装得满满的（脳にいっぱいある）（『人民日報』）

*头里装的满满的（頭にいっぱいある）

日本語：頭がいっぱい／*脳がいっぱい

(<http://kon-katsu.jp/novel/01/03.html>)

(2) 中国語：脑海里浮现了一个疑问（脳に疑問が浮かぶ）（『罗德岛战记』）

*头里浮现了一个疑问（頭に疑問が浮かぶ）

日本語：疑問が頭に浮かぶ／*疑問が脳に浮かぶ

(http://celest.serio.jp/celest/novel_kakato_extra28.html)

(3) 中国語：一个想法进入他的脑海（考えが脳に入る）（『罪与罚』）

一个想法进入他的*头里（考えが頭に入る）

日本語：考えが頭に入る／*考えが脳に入る

(<http://homepage1.nifty.com/simplechic/human137.html>)

中国語では、“头”（頭）は具体的な身体部位を表し、“脑”（脳）は具体的な身体部位だけではなく思考を司る身体部位を表す。例えば、中国語では、“用脑想”（脳で考える）は言うが、“*用头想”（頭で考える）は言わない。そのため、例（1）～（3）では、“脑”を“头”に置き換えられない。一方、日本語では、「脳で考える」より「頭で考える」の方が使用頻度が高い。TWCには「頭で考える」は2920例あるのに対して、「脳で考える」は54例しかない。さらに、TWCでは、「頭にいっぱい」8例に対して「脳にいっぱい」の例は0、「頭に浮かぶ」2783例に対して「脳に浮かぶ」は8例、「頭に入る」2197例に対し、「脳に入る」は167例である。いずれも、「脳」より「頭」の方が使用頻度が高い。つまり、中国語では「脳」は容器で考えはその内容物であると捉えているのに対し、日本語では「頭」は容器で考えはその内容物であると捉えていると言える。「脳」と「頭」のどちらが思考を司る器官かという点、中国語では、「脳」であるのに対して、日本語では「頭」である。この違いは以下の概念メタファーにも影響している。CCLにある中国語の例を見よう。

(4) 在观察的过程中要开动脑筋（観察している時も、頭を働かせるが必要がある）（『中国儿童百科全书』）

- (5) 他只要一转动脑筋，总可以想出法子（頭さえ働かせれば、いつも良いアイデアを思いつく）（『上海的早晨』）
- (6) 年轻时期的学习是加速头脑运转（若い頃の学習は頭の回転を加速する）（『读者（合订本）』）
- (7) 用计算机用的脑子生锈（コンピューターを使うせいで、頭が錆び付く）（/当代/网络语料/网页/C000020.txt）
- (8) 只是大脑短路想不明白一个简单的事情（ただ頭がショートして、簡単なことさえ考えが整理できない）（/当代/CWAC/CAB0120.txt）
- (9) 因一时冲突，头脑发热而跳槽（ちょっとした衝突で、冷静さを失って、転職した）（/当代/CWAC/CAB0120.txt）
- (10) 适当小睡给大脑充电（適当に居眠りをして、頭を充電する）（/当代/网络语料/网页/C000022.txt）
- (11) 不要再费脑筋胡思乱想了（もう頭を使ってあれこれ考えることをやめたほうがいい。）（『绿房子』）

(4)～(11)も“脑”を“头”に置き換えられない。CCLでは、“开动脑筋”（脳を動かす）は315例、“转动脑筋”（脳を回す）は8例、“头脑运转”（脳の回転）は1例、“脑子生锈”（脳が錆び付く）は1例、“大脑短路”（脳がショートする）は1例、“头脑发热”（脳が熱い）は176例、“大脑充电”（脳を充電する）は1例、“费脑筋”（脳を費やす）は68例、“费脑子”（脳を費やす）は16例収集できる。

(4)～(6)では、“开动”（動かす）は機械に電源を入れて作動させること、“转动”（回す）、“运转”（回転する）は機械を動かし、正常に運転していることを意味している。(7)～(9)では、“生锈”（錆び付く）、“短路”（ショートする）、“发热”（熱暴走）は機械が正常に動くことができないことを意味している。(10)(11)では、“充电”（充電する）、“费”（費やす）は機械にエネルギーをチャージしたり、機械のエネルギーを消費したりすることを意味している。中国語では、<考えは機械の動き>という概念メタファーがあり、そのサブメタファーは<脳は機械>である。その写像関係を図1に示す。例

(4)～(11) では、「脳」を「機械」として捉えて、機械が正常に動くことは思考がスムーズに行われること（写像①）に、機械が故障することは思考が滞ること（写像②）に、機械にエネルギーをチャージ・消費することは思考のために準備を行ったり、思考が順調に進むこと（写像③）に写像している。

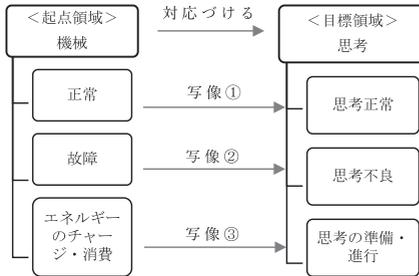


図1 <脳は機械> (中) の写像

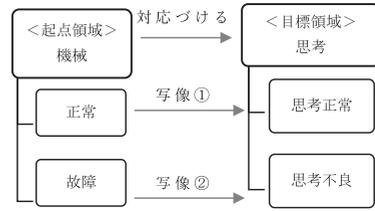


図2 <頭は機械> (日) の写像

一方、日本語では、TWCで調べると、「頭を使う」は2043例、「頭の回転」は908例、「頭が回転する」は46例、「頭をフル稼働する」は4例、「頭が錆び付く」は1例、「頭が故障する」は2例、「頭がショートする」は6例である。「頭を充電する」「頭を費やす」といった用例は見つからない。そして、中国語と同じ「脳」については、「脳を使う」は286例、「脳の回転」は28例、「脳が回転する」は8例、「脳をフル稼働する」は1例、「脳が錆び付く」は3例、「脳がショートする」は2例である。TWCにおいては、「使う」「回転」「回転する」以外の「フル稼働する」「錆び付く」「ショートする」では「頭」と「脳」の間に差が見られない。そこで、総語数100億語の『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC)⁽⁵⁾を利用し、さらに調べた。その結果、「頭をフル稼働する」は202例、「脳をフル稼働する」は104例、「頭がさび付く」は29例、「脳がさび付く」は11例、「頭がショートする」は433例、「脳がショートする」は91例であった。つまり、日本語では、思考の状態を表すとき、「脳」より「頭」の使用が好まれると言える。したがって、中国語と違って、<考えは機械の動き>という概念メタファーのサブメタファーは<頭は機械>となる。ただし、「頭を充電する」「頭を費やす」の用例が見つからな

いことから、機械のエネルギーをチャージ・消費するように思考のために準備したり思考を進めたりするという写像がないことが分かる。図2は日本語の写像である。

以上によって、〈思考〉メタファーに関して、日中は同じ上位メタファー〈考えは機械の動き〉があるのに対して、そのサブメタファーは日本語は〈頭は機械〉、中国語は〈脳は機械〉のように目標領域が異なることが明らかになった(表1)。また、図1、図2に表されるように、中国語の〈脳は機械〉は日本語の〈頭は機械〉より多くの写像関係を持っていることがわかった。

表1 日中〈思考〉メタファーの異同

	中国語	日本語
上位メタファー	考えは機械の動き	考えは機械の動き
サブメタファー	〈脳は機械〉	〈頭は機械〉

4. 2 Lang-8 学習者コーパスにおける学習者のコロケーションの産出

4. 1 節では、日本語と中国語を比べて、〈思考〉に関する概念メタファーの異同を検討した。その結果、同じ「機械の動き」を通して「考え」を理解しているが、〈考えは機械の動き〉という上位概念メタファーのサブメタファーとして中国語では〈脳は機械〉があるのに対して、日本語では〈頭は機械〉があることが明らかになった。そして、中国語は日本語より多くの写像関係を持っていることが明らかになった。このことにより、学習者が日本語を勉強する時、日本語と中国語の概念メタファーの異同によって、正用と誤用が生じると予想できる。つまり、学習者の産出する表現には、①学習者の母語の〈脳は機械〉の写像に対応する誤用(母語の写像の負転移)、②(CS1) L2から(CS2) L2へシフトしていく途中の誤用、③目標言語の〈頭は機械〉の写像に対応する正用があると予想できる。以上の仮説を裏付けるために、Lang-8 学習者コーパスを用いて思考及び身体部位に関する表現を調べ、母語と目標言語の概念メタファーの写像に対応する文を調べてみる。

その結果、〈脳は機械〉の写像に対応する文11例、〈頭は機械〉の写像に対応する文は全部で37例抽出できた。これらの用例は以下の3つのタイプに分類できる。まず、その誤用のType①を見よう。

Type①：母語の概念メタファーの写像に対応する誤用

〈脳は機械〉の写像に一致する誤用	中国語直訳
1. 毎日このままぼんやりしていたら、* <u>脳が錆びがつきがちだ</u> (修正：脳が錆びつきそうだ)	* <u>脑袋容易生锈</u>
2. 今日の家授業は* <u>脳力がかかりすぎた</u> (修正：頭を使いきすぎた)。	* <u>太费脑力了</u>

Type①の誤用は、母語の概念メタファーの写像に対応するものである。1. も2. も「脳」を「機械」として理解している。1. は、脳を使わないことイコール機械を使わないことであるため、錆がつくと表される。これは4. 1節の図1の写像②に対応している。2. は、Lang-8 学習者コーパスでは全部で3例が観察できる。脳を使うことが機械のエネルギーを消費することにとえられる。これは図1の写像③に対応している。Type①の誤用2. では、母語に写像があるのに対して、目標言語には写像がないことで母語の写像の負転移が起きやすいことが示唆された。次に、Type②の誤用を見よう。

Type②：(CS1) L2から (CS2) L2へシフトしていく途中の誤用

〈頭は機械〉の写像に一致する誤用	中国語直訳
3. でも、これらの知識は私たちの考えに、 <u>頭を動かすことに、非常に役に立つ</u> と思う。(修正：頭を働かせる)	* <u>动头</u>
4. 頭はロボット気味ですね。しばらく日記を書いていないので、* <u>頭が錆びになる</u> ようでした。(修正：頭が錆びつく)	* <u>头生锈</u>
5. ですから、われわれの90後 ⁽⁶⁾ 絶対は* <u>頭が壊れた人</u> じゃないです。(修正：頭がおかしい)	* <u>头坏掉了</u>
6. そして、その新しい太陽を見ていると、大感激をしていて、* <u>頭も涼しく</u> なります、人生に関する大切な問題も考えられます。(修正：冷静になる)	* <u>头变凉</u>

3.～6.は、学習者の母語に直訳すると、「***劲头**」「***头生锈**」「***头坏掉了**」「***头变凉**」になる。いずれも中国語では非文である。しかし、3.～6.はコロケーションは不自然であるものの目標言語の概念メタファーの写像<頭は機械>には対応しており、習得が途中まで進んでいることがわかる。3.では、学習者は「知識」が「考え」「頭を動かすこと」に役にたつと述べている。すなわち、「頭を動かす」ことを「考える」こととしている。「頭」を「機械」のように捉え、機械を動かすことを考えがスムーズに行われることとして理解しているのである。4.では、学習者はまず「頭」が「ロボット」みたいと述べ、次に、しばらく頭を使って勉強をしていないことを使っていない機械が錆びることに対応づけて、「頭」が「錆びになる」ように感じると述べている。5.では、学習者は「頭」が正常に働かないことを機械が故障していることとして理解している。6.では、機械が正常な温度に下がれば正常に作動するという捉えかたが「頭も涼しくなる」という表現で示されている。ただし、日本語では「頭が涼しくなる」とは言わず「頭が冷静になる」と言う。中国語でも“**头脑冷静下来**”（脳が冷静になる）と言い、“***头脑变凉**”（脳が涼しくなる）とは言わない。

3.は4.1節の図2の写像①に対応している。4.～6.は4.1節の図2の写像②に対応している。Type②の誤用は、母語の概念メタファー<脳は機械>から目標言語の概念メタファー<頭は機械>への習得が進んでいるが、まだ学習者は目標言語の言語規範を完全に身につけていないことを示す。

Type③：目標言語の<頭は機械>の写像に一致する正用

正用
7. <u>彼女はいい顔をしてるし、頭の回転も速いし、羨ましい。</u>
8. <u>今日の会議では頭はちょっと回らなかった気がします。</u>
9. <u>なぜこんな物を買うのはよくわかりません、だから、インターネットでショッピングことは大好きです、値段が安いし、頭を冷やして考えると、買うべきものを買いました、お金を無駄に使わないわけです。</u>

目標言語の写像に対応している産出は7.～9.が見られ、それぞれ複数の例がある。7.では、「頭」を正常に動いている機械として理解しており、図2

の写像①に対応している。8.と9.では、「頭」を機械として捉え、正常に思考できないことを機械が回らないことや熱暴走することにとえている。そして、9.では、そうならないように機械としての「頭」の温度を下げるのが、「頭を冷やす」という表現を動機付けている。これらは図2の写像②に対応している。

以上のように、学習者のコロケーションの産出は正用であれ、誤用であれ、概念メタファーによって動機付けられている。ここでは、誤用は、母語と目標言語の概念メタファーのズレによって引き起こされることを明らかにし、さらに、今まで適切に解釈されてこなかった学習者の母語の非直訳による誤用（Type②）は、(CS1) L2から (CS2) L2へシフトしていく途中の誤用であることを提示した。これにより、学習者のコロケーションの誤用の原因がより明確になった。

5. 考察

李 (2016) はコロケーションの誤用原因を主に母語の「直訳」によると主張し、コロケーションを大きい語彙として捉えれば、コロケーション習得のプロセスは Jiang (2000) の L2 語彙習得モデル (図3) に当てはまると述べている。

Jiang (2000) では、L2 の語彙発達は 3 つの段階に分けられる。第 1 段階では、新しい L2 語彙項目が作られ、音韻と表記の形式情報 (formal specification) しかない、孤立の存在である。L2 と概念リンクがなく、L1 を経由して概念にアクセスできる。第 2 段階では、L2 の音韻と表記の形式情報と L1 の意味・統語 (lemma) を次第に統合する。L2 から概念にアクセスできるが、その結びつきが弱い。第 3 段階では、L2 の独自の形式情報と形態情報からなる lexeme と lemma が確立される。L2 から概念にアクセスできる。つまり、第 2 段階の L2 習得は、L1 の語彙の意味と統語知識に頼っていると述べられている。

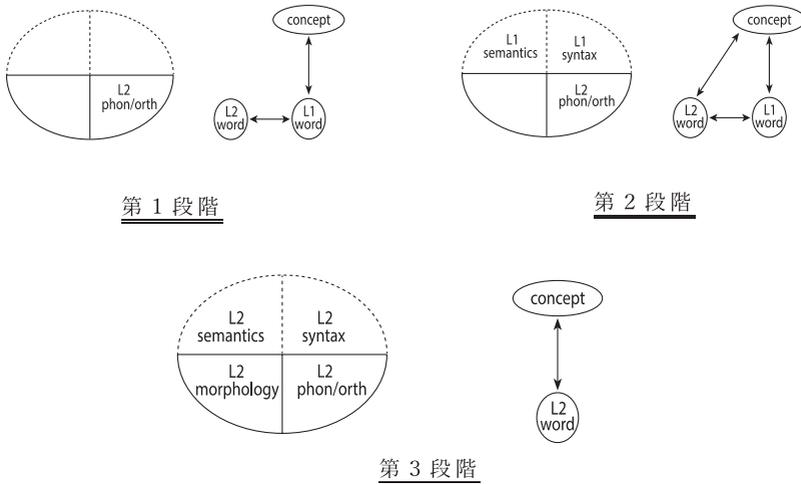


図3 Jiang (2000) L2語彙習得モデル、引用者が一部修正

しかし、以下の2つの疑問が浮かぶ。1つ目は、コロケーションを大きい語彙として捉えてよいかどうかということである。コロケーションが語彙と最も異なるところは、コロケーションは語と語の結び付きで、恣意的なものではなく、概念メタファーによって支えられていることである。そのため、本稿で検証したように、コロケーションの産出は母語と目標言語の一对一の直訳より、母語の概念メタファーに影響される。2つ目は、母語の直訳ではない誤用についてである。確かに日本語と中国語は似たような漢字が多く使われるので、学習者がL1の形式情報、意味的、統語的知識を利用し、L2を習得していただろうと考えられる。しかし、母語に直訳できないコロケーションの誤用（例：*頭も涼しくなる）について、Jiang (2000) のモデルの第2段階では説明できない。すなわち、中国人日本語学習者のコロケーション習得のプロセスはJiangのL2語彙習得モデルに当てはまるとは言いがたい。言い換えれば、L1の意味・統語と直接的に関連が見られず、傾向的に現れるL2の誤用について、Jiang (2000) のモデルは無効だと考えられる。

本稿では、概念メタファーの観点から、学習者が産出したコロケーションの誤用原因を探り、L1の意味・統語がL2のコロケーションの産出に影響す

るだけでなく、L1とL2の概念システム（L1、L2の概念メタファーのズレ）もL2のコロケーションの習得に影響を与えることを明らかにした。L1、L2の概念メタファーと学習者のコロケーションの産出の関係は、以下の図4のようにまとめられる。図4の黒い円形はL1の概念メタファーの写像、黒い菱形はL2の概念メタファーの写像を意味している。

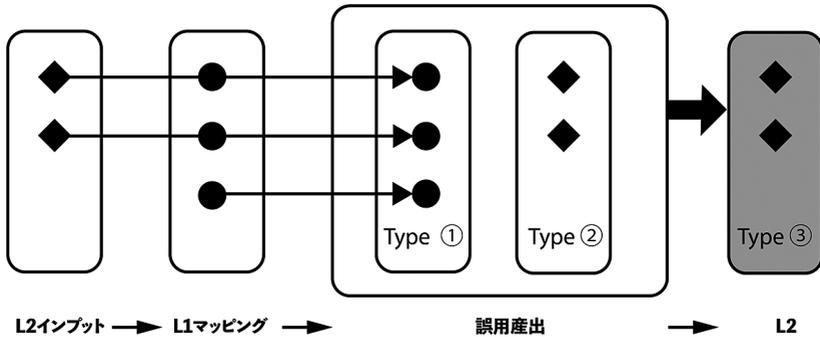


図4 概念メタファーとコロケーションの産出との関係

学習者がL2を学ぶ時、L1の概念メタファーを通してL2を理解する。例えば、中国語には“腦子生銹（脳が錆びつく）”というコロケーションがある。それは「脳」を「機械」に喩える〈脳は機械〉という概念メタファーに基づいている。学習者がL2のインプットで、「頭が錆びつく」というコロケーションに出会うとき、「頭」「錆びつく」の個々の単語の字義通りの意味で理解するより、母語の概念メタファーの写像でコロケーションの意味が理解できる。

次に、産出段階に移る。産出は3つの部分からなっている。第1に、L1のメタファー写像と一致している表現で、4.2で述べている Type①の誤用が含まれる。「*脳力がかかりすぎる」のように、目標領域も写像も母語の概念メタファーに従っているものである。第2に、L2の写像と対応している表現で、Type②の誤用が含まれる。「*頭が涼しくなる」のように、学習者は目標領域も写像も習得できたが、L2の細かい言語規範までは身に付けていないものである。Type②の誤用例からL2成人学習者は先に細かい言語規

範を習得するより、母語の概念メタファーの転移により、概念を先に習得することが示唆される。最後に、学習者の試行錯誤によって、L2の概念メタファーの写像に対応している正用（Type③）、つまり、L2の写像及びL2の言語規範も習得した正しいコロケーションが産出できると考えられる。本稿では、母語の直訳より、L1概念メタファーとL2概念メタファーの異同が、L2習得を正転移、負転移していくことを主張する。このことにより、今まで母語の直訳で説明がつかず放置されていた非直訳の誤用（Type②）は図4で説明できる。

6. おわりに

本稿では、韓（2014）の研究結果を修正し、日本語と中国語の概念メタファーの共通点と相違点を明らかにした。また、学習者コーパスから日中概念メタファーの写像に対応する正用と誤用を抽出し、学習者が産出したコロケーションを母語の写像に対応する誤用（Type①）、目標言語の写像に対応する正用（Type③）、および母語の概念メタファーから目標言語の概念メタファーにシフトしていく途中に現れる誤用（Type②）に分類した。つまり、Danesi（2008）で述べている概念誤用はイメージ・スキーマや起点領域を間違えたマッピングによるものだけでなく、目標領域を間違えたマッピングも概念誤用を引き起こすことを本研究は示した。本研究の結果を踏まえれば、コロケーションを指導する際には、無意味な大量インプットより、コロケーションを支える概念メタファーの提示のほうがコロケーションの学習を促すのではないかと考えられる。

今回は学習者の自然産出に現れるコロケーションを分析するために、Lang-8 学習者コーパスを利用した。Lang-8 学習者コーパスは学習者が産出した文数が多いため、ある概念メタファーによって動機付けられている学習者の自然産出したコロケーションの研究に相応しいが、コーパスのデザインによって、学習者の学習歴、日本語レベルが明示されていない。そのため、母語と日本語の概念メタファーのズレはどのレベルの学習者にどのように影響しているか説明がつかない。これは本稿の限界だと言える。しかし、本稿

はコロケーションの誤用分析に新たな知見を提供し、今後のコロケーションの指導法を再考するための一助となるのではないかと考える。

注

- (1) ここで言う恣意性とは、コロケーションの生成が動機付けられていないことと、推測不可能であることを意味する。主に①言語間の恣意性、②言語内の恣意性、③言語処理と言語習得上に現れる恣意性の3分類に分けられる。
- (2) <http://nlt.tsukuba.lagoinst.info> (2018年3月～10月データ収集)
- (3) http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=gudai (2018年3月～10月データ収集)
- (4) <https://sites.google.com/site/naistlang8/corpora/home> (2018年3月～10月データ収集)
- (5) http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/nwjc/ (2018年3月～10月データ収集)
- (6) 「90後」は、中国では1990年以後に生まれた人を言う。

参考文献

- 韓涛 (2014) 『中国語の概念メタファーに関する研究—認知メタファー理論の立場から—』 博士論文 名古屋大学
- 大曾美恵子・滝沢直宏 (2003) 「コーパスによる日本語教育の研究—コロケーション及びその誤用を中心に—」 『日本語学』 22-5 pp. 234-244 明治書院
- 辻幸夫 (2013) 『認知言語学キーワード事典』 研究社
- 李文平 (2016) 「中国人日本語学習者のためのコロケーション学習の指導法に関する基礎的研究—作文データに基づく『名詞+を+動詞』のコロケーションを中心に—」 博士論文 名古屋大学
- 李文鑫 (2017) 「概念メタファー理論に基づくコロケーションの誤用分析—『興味』を例として—」 『ことば』 38 pp. 83-101 現代日本語研究会
- Boers, Frank (2000) Metaphor Awareness and Vocabulary Retention. *Applied Linguistics*, 21 (4), pp. 553-571.
- Danesi, M. (1993) Metaphorical Competence in Second Language Acquisition and Second Language Teaching: The Neglected Dimension. *Language, Communication and*

Social Meaning, pp. 489–500.

Danesi, M. (2008) Conceptual Errors in Second-Language Learning. *Applications of Cognitive Linguistics*, 9, pp. 231–256.

Jiang, N. (2000) Lexical Representation and Development in a Second Language. *Applied Linguistics*, 21 (1), pp. 47–77.

Kövecses, Z. & P. Szabó (1996) Idioms: A View from Cognitive Semantics. *Applied Linguistics*, 17 (3), pp. 326–355.

Liu, Dilin (2010) Going Beyond Patterns: Involving Cognitive Analysis in the Learning of Collocations. *TESOL Quarterly*, 44 (1), pp. 4–30.

Szudarski, Paweł. & Ronald, Carter (2016) The Role of Input Flood and Input Enhancement in EFL Learners' Acquisition of Collocations. *International Journal of Applied Linguistics*, 26 (2), pp. 245–265.

Yu, N (2003). Chinese Metaphors of Thinking. *Cognitive Linguistics*, 14, pp. 141–165.

Webb, Stuart, Jonathan Newton & Anna Chang (2013) Incidental Learning of Collocation. *Language Learning*, 63 (1), pp. 91–120.

謝辞

本稿は、第99回第2言語習得研究会（関東）（2018年2月17日於お茶の水女子大学）での口頭発表原稿に加筆・修正を加えたものである。発表ならびに執筆の際、多くの方にお世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。

（り う えん しん：筑波大学大学院）

（2018.11.10 受理）